

平成19年の病害虫の発生状況

1. 病害虫の発生経過概要及び発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
早期水稲	葉いもち	遅	少	・7月2半旬に発生を認め、平年より少ない発生であった。その後の進展もほとんどなく少ない発生で推移した。	・5月下旬～6月下旬の少雨。	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	遅	少	・8月2半旬に発生を認め、少ない発生であった。その後の進展もなかった。	・葉いもちの発生が少なかった。 ・7月中旬以降の少雨、8月上旬の高温。	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤等による本田防除
	縞葉枯病	早	多	・6月2半旬に発生を認め、やや多い発生であった。その後、7月上旬にかけ増加し多発生となった。	・ヒメトビウカの高毒率が高かった。 ・本田におけるヒメトビウカの発生が多かった。	
	ヒメトビウカ	並	多	・本田では6月2半旬に発生を認め、多い発生であった。7月下旬以降は減少し、やや多い発生で推移した。	・5月下旬～6月下旬の少雨。	・イミダクロプリド剤等の箱施用による防除 ・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	—	—	・発生を認めることができなかった。	・ツマグロヨコバイの保毒率が低かった。	
	ツマグロヨコバイ	並	やや多	・本田では6月2半旬に発生を認めやや多い発生でその後もやや多い発生であった。	・5月下旬～6月下旬の少雨。	・エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	紋枯病	早	並	・6月3半旬に発生を認めた。7月下旬にやや増加したが、平年並の発生で推移した。	・6月中下旬の高温。	・バリダマイシン剤、フルトラニル剤、ジクロシメジン剤、ベンシクロン剤による本田防除
	セジロウカ	並	並	・5月1半旬に飛来を初確認した。その後、5月5～6半旬、6月5半旬～7月2半旬に断続的にまとまった飛来が認められた。 ・本田では6月にやや多い発生であったが、7月以降は平年並の発生となった。	・5月の飛来量が平年よりやや多かった。	・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	トビイロウカ	遅	やや多	・6月5半旬に飛来を初確認し、その後、7月1～2半旬にやや多い飛来、7月4半旬にまとまった飛来が認められた。 ・本田では、6月5半旬に発生を認め、やや多い発生で推移した。	・飛来量がやや多かった。	・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	コブノメイガ	並	多	・6月4半旬にやや少ない飛来、6月6半旬にやや多い飛来、7月1半旬に多飛来を認めた。その後も7月4半旬頃まで断続的に飛来が認められた。 ・本田では、7月1半旬飛来波の第1世代幼虫による被害が一部圃場で多かった。	・飛来量が多かった。	・カルタップ剤、メキシフェノジド剤等による本田防除
普通期水稲	イネミズゾウムシ	並	やや多	・移植直後の4月中旬以降発生が認められ、やや多い発生であった。	・3月下旬の高温。	・ベンフラカルブ剤、イミダクロプリド剤の箱施用による防除 ・多発圃場ではシクロプロトリン剤による本田防除
	斑点米カメムシ類	並	並	・雑草地における調査では、6月以降7月まで平年並の発生で推移した。 ・本田では、出穂期以降発生が認められたが、平年並の発生であった。	・コブノメイガの多発生に伴い穂揃い期頃の防除が徹底された。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、MPP剤等による防除
普通期水稲	葉いもち	遅	少	・7月6半旬に発生を認めた。その後やや増加したが少発生であった。	・昨年の発生が少なかった。 ・7月中旬以降の少雨、8月上旬の高温。	・トリシクラゾール剤、プロベナゾール剤等の箱施用による防除
	穂いもち	並	少	・9月2半旬に発生を認め、少発生であった。	・葉いもちの発生が少なかった。 ・8月上旬以降の高温少雨。	・出穂期頃のフェリムゾン・フサライド剤、カスガマイシン・フサライド剤、アゾキシストロビン剤等による本田防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	縞葉枯病	並	多	・7月2半旬に発生を認め、平年並の発生であったが7月下旬以降増加し、多発生で推移した。一部多発圃場も認められた。	・ヒメトビウンカの保毒率が高かった。 ・本田におけるヒメトビウンカの発生が多かった。	
	ヒメトビウンカ	並	やや多	・5月の雑草地及び小麦圃場ではやや多い発生であった。 ・本田では7月～8月までやや多く推移し、9月以降はやや減少し、平年並となった。	・5月下旬～6月下旬の少雨。 ・7月中旬以降の少雨。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	萎縮病	—	—	・発生を認めなかった。	・ツマグロヨコバイの保毒率が低かった。	
	ツマグロヨコバイ	並	やや少	・期間を通してやや少ない発生であった。	・トビイロウンカの多発生に伴い同時防除された。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	紋枯病	早	やや多	・7月2半旬に発生を認め、全体的には9月上旬まで平年並の発生で推移したが、9月下旬以降も進展し、やや多い発生となった。早植え圃場を中心に一部圃場で多発生した。	・水稻の初期生育がやや不良で、分けつがやや少なかった。 ・8月上旬以降の高温。	・チフルザミド剤の箱施用による防除 ・フルトラニル剤、ベンシクロン剤、バリダシン剤、アゾキシストロピン剤等による本田防除
	セジロウンカ	並	やや多	・5月1半旬に飛来を初確認した。5月5～6半旬、6月5半旬～7月2半旬には断続的にまとまった飛来が認められた。 ・本田ではフィプロニル剤を用いた圃場を中心に産卵痕や成幼虫の発生が多かった。全体としてはやや多い発生で推移した。	・飛来量がやや多かった。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、プロロフェジン剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤等による本田防除
	トビイロウンカ	遅	多	・6月5半旬に飛来を初確認し、7月1～2半旬にやや多い飛来、7月4半旬にまとまった飛来が認められた。 ・本田では飛来期以降7月までやや多い発生であった。8月以降増加し多い発生で推移した。 ・坪枯れの発生は8月下旬に認め、一部地域を除き9月中旬まで急激な増加はなかったが、9月下旬以降各地で坪枯れの発生が増加した。	・飛来量がやや多かった。 ・9月以降の高温。	・イミダクロプリド剤、フィプロニル剤等の箱施用による防除 ・BPMC剤、プロロフェジン剤、エトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、ジノテフラン剤等による本田防除
	コブノメイガ	並	多	・6月4半旬にやや少ない飛来、6月6半旬にやや多い飛来、7月1半旬に多飛来を認めた。その後7月4半旬頃まで断続的にまとまった飛来が認められた。 ・本田では、7月1半旬飛来波の第1世代幼虫による食害が7月下旬に多くなった。さらに、7月下旬～8月中旬にかけて成虫の多発生が続いたが、第2世代幼虫による被害は平年並となった。	・飛来量が多かった。 ・8月上中旬の防除が徹底された。	・フィプロニル剤、スピノサド剤の箱施用による防除 ・テブフェノジド剤、カルタップ剤、メトキシフェノジド剤等による本田防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	斑点米カメムシ	並	並	・雑草地における調査では6月以降8月上旬まで平年並の発生であった。 ・本田では8月下旬にやや多かったが9月上旬以降は平年並の発生となった。	・トビイロウンカが多発生に伴い防除が徹底された。	・圃場周辺の雑草除去 ・出穂期以降のエトフェンブロックス剤、シラフルオフェン剤、MPP剤、ジノテフラン剤等による防除
	スクミリンゴガイ	並	やや多	・やや多い発生で推移した。	・前年の発生がやや多く冬季の気温が高かった。 ・7月上旬の多雨。	・IBP剤、カルタップ剤、ペンシルタップ剤等による本田防除 ・卵塊、貝の捕殺
麦類	赤かび病	大麦:遅 小麦:遅 裸麦:遅	大麦:少 小麦:少 裸麦:少	・3麦ともに平年より遅く、5月2～3半旬に発生を認め、少ない発生であった。	・出穂開花期の4月上旬～中旬は降雨が少なかった。その後4月下旬～5月上旬は降雨量は多かったが、連続降雨がほとんどなく、5月中下旬は降雨量が少なかった。	・開花盛期とその7～10日この薬剤散布(チオファネートメチル、プロピコナゾール、メコナゾール)
	うどんこ病	大麦:- 小麦:遅 裸麦:-	大麦:少 小麦:やや多 裸麦:少	・大麦、裸麦では発生を認めることができなかった。小麦では平年より遅く、4月6半旬に発生を認め、やや多い発生で推移した。	・2月～3月にかけて気温が高く推移し、生育が旺盛になり一部過繁茂であった。	・多発圃場におけるチオファネートメチルによる薬剤散布
	黒穂病	大麦:早 小麦:早 裸麦:並	大麦:やや多 小麦:やや多 裸麦:並	・3麦ともに4月2～3半旬に発生を認め、発生はやや多かった。	・前年の発生がやや多く、伝染源量が多かった。	・種子消毒
	斑葉病	大麦:並 裸麦:-	大麦:やや少 裸麦:少	・大麦で4月2半旬に発生を認め、裸麦では発生を認めなかった。その後の進展はほとんどなく、やや少ない発生となった。	・種子消毒により近年減少傾向にある。	・種子消毒
	アブラムシ類	大麦:遅 小麦:遅 裸麦:遅	大麦:やや少 小麦:やや少 裸麦:並	・3麦とも3月2～3半旬に発生を認め、平年よりやや多い発生で推移した。	・4月上旬の少雨。	
ジャガイモ	葉巻病	春作:やや遅 秋作:並	春作:やや多 秋作:並	・春作:4月下旬から発生し、やや多い発生であった。 ・秋作:ほとんど発生しなかった。		・種いもの更新 ・アブラムシの防除
	モザイク病	春作:並 秋作:並	春作:やや少 秋作:やや少	・春作:ほとんど発生しなかった。 ・秋作:ほとんど発生しなかった。		・種いもの更新 ・アブラムシの防除
	疫病	春作:遅 秋作:並	春作:少 秋作:並	・春作:初発生は4月下旬に確認し、5月下旬にわずかに発生した。 ・秋作:ほとんど発生しなかった。	・4月下旬～5月上旬の降雨。	・マンセブ、マンネブ、フェルアマイト系、TPN剤等による防除
	青枯病	春作:やや遅 秋作:並	春作:やや少 秋作:やや少	・春作:ほとんど発生しなかった。 ・秋作:ほとんど発生しなかった。		・カルビクリンD-D剤等による土壌消毒
	アブラムシ類	春作:並 秋作:並	春作:並 秋作:並	・春作:3月上旬から発生し、平年並み発生であった。 ・秋作:9月下旬から発生し、平年並みの発生であった。		・イタクアフリド、合成ピレスロイド系剤等による防除
	ニジュウヤホシテントウ	春作:並 秋作:やや遅	春作:並 秋作:並	・春作:4月下旬から発生し、平年並みの発生であった。 ・秋作:10月上旬に発生を認め、平年並みの発生であった。		・アブラムシ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	ジャガイモガ	春作:並 秋作:並	春作: やや多 秋作:多	・春作:4月下旬から発生し、やや多い発生であった。 ・秋作:9月下旬から発生し、平年より多い発生であった。	・9月の少雨、高温。	・アフラムシ類との同時防除
	食葉性ヤガ類 (ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ)	春作:早 秋作:並	春作:並 春作: やや多	・春作:4月上旬から発生し、平年並の発生であった。 ・秋作:9月下旬から発生し、平年よりやや多い発生であった。 オオタバコガについては平年より多い発生であった。	・3月下旬の高温。	・アフラムシ類との同時防除 ・有機リ系剤等による防除
大豆	べと病	やや遅	やや多	・9月2半旬に発生を認め、平年よりやや多い発生であった。		
	葉焼病	並	多	・8月2半旬に発生を認め、その後増加し、平年より多い発生であった。	・9月の高温。	
	ハスモンヨトウ	並	並	・7月6半旬から発生を認めたが、平年並の発生で推移した。また白変葉もみられたが、白変葉か所数は少なかった。	・8月上旬から9月下旬にかけての防除徹底。	・インドキサカルブ剤、エトフェンブロックス剤、ピリダリル剤、クロルフルアズロン剤による防除
	鱗翅目幼虫	並	並	・8月2半旬にウタバ類の発生を認め、平年並の発生であった。		・ハスモンヨトウとの同時防除
	吸蜜性カメムシ	並	やや少	・9月2半旬に発生を認め、やや少の発生で推移している。		・エトフェンブロックス剤、クロチアニジン剤による防除
かんきつ	そうか病	葉:遅 果実: やや遅	葉:少 果実:少	・春葉における初発生は5月下旬と平年より遅く、発生量はほぼ平年より少く推移した。 ・果実での初発生は6月下旬とやや遅く、発生量は平年より少く並で推移した。	・4月上～中旬の少雨。 ・初期防除が徹底された。	・イミベンコナゾール剤、ジチアノ剤等による発芽期の防除 ・フルアジナム剤、クレスキムメチル剤による灰色かび病との同時防除
	かいはよう病	葉:早 果実:並	葉:多 果実:多	・春葉における初発生は4月下旬と平年より早く、その後発生は平年より多く推移した。 ・果実における初発生は6月下旬と平年並みで、その後発生は平年より多く推移した。例年では発生を認めない極早生温州での発生も認められた。	・越冬病斑が多かった。 ・発芽期以降の防除が十分でなかった。	・銅剤による防除(スルフトマイツ剤の失効を考慮した初期防除の強化) ・発病枝葉の除去 ・防風対策の強化 ・ミカンハモグリガの防除(ネオニコチノイド系、カーバメート系薬剤)
	黒点病	並	やや少	・初発生は6月下旬と平年並で、その後の発生は平年よりやや少く推移した。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・マンゼブ剤、マンネブ剤による防除
	ミカンハダニ	並	やや少	・春先から6月上旬までは平年並の発生で、その後7月下旬まで平年よりやや少ない発生となった。8月に平年並の発生に増加したが、9月に入るとやや少から少発生に減少した。ただし、圃場間の差が大きく、多発生している圃場も多く見られた。	・平年並みの越冬密度であった。 ・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。 ・7月上旬、9月中旬の強雨。	・冬季及び夏季のマツ油乳剤による防除 ・8月下旬～9月のイトキサゾール剤、スピロジクロフェン剤、ピフェナセート剤等による防除
	ミカンサビダニ	やや早	並	・平年よりやや早い6月下旬に発生を認め、その後平年並みの発生で推移したが、一部の地域では発生が多かった。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。 ・6月下旬～7月中旬に防除が徹底された。	・ピリダベン剤、酸化フェンタクス剤による防除 ・イソキサチオン剤、PAP剤によるカイラムシ類との同時防除 ・クロルフェニル剤によるチャノキアザミウマとの同時防除 ・スピロジクロフェン剤、ピフェナセート剤によるミカンハダニとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	チャノキイロアザミウマ	並	多	・6月下旬に被害果の発生を認め、その後、やや多～多い発生で推移した。 ・特に、7月上旬～8月上旬に果梗部の被害が、9月下旬に果頂部の被害が急増した。 ・諫早市のトラップ誘殺量は8月上旬～9月上旬にかけてやや多～多であった。 ・9月下旬以降の極早生温州みかんの収穫時でも果実での寄生虫が目立ち、被害が進行していた。	・越冬量が多かった。 ・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の高温少雨。	・ネオニコチノイド系剤、アセフェート剤、マンゼブ剤、合成ピレスロイド系剤による防除 ・光反射シートによる防除
	カメムシ類	やや遅	8月前半以前:少 8月後半以降:やや少	・チャルネオカメムシの越冬量は平年よりも少なく、8月までの園での発生はほとんどなかった。当年世代は9月上・中旬頃から園での発生が認められたが、平年より少ない発生であった。	・越冬量が多かった。 ・ヒノキきゅう果量は平年よりやや少なく、増殖量もやや少なかった。	・合成ピレスロイド系剤、ネオニコチノイド系剤による防除
	マルカイガラムシ類	並	やや多	・果実での発生は、9月上旬からみられ、平年よりやや多かった。	・幼虫期の少雨(5月上～中旬、7月下旬)。	・冬季及び夏季のマシ油乳剤による防除 ・6月上旬～下旬のPAP剤、DMPT剤等による防除
	クワゴマダラトリ	並	やや多	・東北地域、西彼地域を中心に、新梢伸長期に発生が認められた。	・昨秋、東北地域、西彼地域で幼虫巢の発生がやや多かった。	・前年秋季に幼虫巢を除去 ・春季に有機リン剤による防除
びわ	がんしゅ病	並	並	・4月の春枝伸長期にやや発生が多かったが、その後はほぼ平年並みに推移した。	・昨年の発生が多く、越冬病斑が多かったが、その後は少雨傾向が続いた。	・芽かき、剪定後の銅水和剤による防除
	灰斑病	並	葉:並 果実:やや少	・平年並の5月上旬に春葉における発生を認め、春葉～夏葉における発生は平年並に推移した。 ・腐敗果の発生はやや少なかった。	・5～6月の少雨。 ・前年開花期の少雨。	・春葉及び夏葉伸長後の銅・カスカマイシン剤による防除 ・開花期のイミダジアルベシル酸塩剤による防除
	ナシヒメシクイ	並	やや多	・フェロモントラップ(諫早市)における誘殺量は年間を通してやや多く推移した。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・カルタップ剤による防除
	カメムシ類	並	少	・ほとんど発生はなかった。	・越冬量が少なかった。	・袋かけの実施
なし	黒星病	やや早	やや少	・葉、果実ともに平年よりやや早い4月下旬に初発を確認した。5月中旬までは、平年並に推移したが、その後は少ない発生であった。	・昨年発生が多く、越冬密度が高かった。 ・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。 ・発芽期から幼果期の防除の徹底。	・EBI剤等による防除
	赤星病	並	少	・初発は4月下旬で平年並であった。その後の発生は平年より少なく推移した。	・発芽期から幼果期の防除の徹底。 ・5月中旬～6月下旬の少雨。	・黒星病との同時防除
	うどんこ病	やや遅	やや少	・7月下旬に初発を確認した。7月下旬はやや多かったもののその後は平年より少ない発生であった。	・発芽期から幼果期の防除の徹底。	・黒星病との同時防除
	ナシヒメシクイ	並	やや多	・フェロモントラップ(諫早市)における誘殺量は年間を通してやや多く推移した。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・合成ピレスロイド系剤、有機リン剤による防除
	ハダニ類	並	やや少	・平年より少なく推移した。	・防除の徹底。	・ミルベクチン剤、イトキサゾール剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	カメムシ類	やや遅	少	・9月中旬以降に一部の圃で飛来があったが、ほとんどの圃で収穫が終了しており、影響はなかった。	・越冬量が多かった。 ・ヒノキきゅう果量は平年よりやや少なく、増殖量もやや少なかった。	・合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除。
	アブラムシ類	やや遅	少	・4月上旬に発生を確認し、その後の発生は平年より少なく推移した。	・防除の徹底。	・有機リン系剤、カーハメイト系剤、ネオニコチノイド系剤等による防除
ぶどう	黒とう病	並	並	・初発は4月下旬で平年並で、その後の発生は平年並で推移したが、発生圃場率は高かった。	・4月下旬～5月上旬の多雨。	・トキシアクリレート剤、シチアノ剤、マンゼブ剤等による防除
	べと病	やや遅	やや多	・初発は6月下旬で平年よりやや遅く、8月までは平年より少なくて推移したが、9月に平年よりやや多い発生となった。	・8月までに発生が少なく、気象条件も発生しにくい条件であったため、8月下旬～9月上旬の防除が徹底されなかった。	・トキシアクリレート剤、マンゼブ剤、ホセチル剤、酸アミド系剤等による防除
	うどんこ病	—	少	・巡回調査では発生を認めず、少ない発生であった。	・防除の徹底。	・トキシアクリレート剤、EBI剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	・諫早市のトラップ誘殺量は8月上旬～9月上旬にかけてやや多～多であった。果房での被害は5月下旬から見られ、平年より多かった。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・ネオニコチノイド系剤、合成ピレスロイド系剤、有機リン系剤等による防除 ・袋かけの実施
茶	炭疽病	並	やや少	・5月下旬から発生が認められ、平年よりやや少ない発生で推移した。	・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・EBI剤等による防除
	チャノコカクモンハマキ	並	並	・フェロモントラップ(東彼杵町)による誘殺量は平年よりやや少なくて推移した。 ・被害はほぼ平年並であった。	・越冬量が少なかった。	・イマメクチン安息香酸剤、有機リン系剤、IGR剤による防除
	チャノホソガ	並	並	・フェロモントラップ(東彼杵町)による誘殺量は平年並であった。 ・圃での被害は4月下旬から発生し、県北地域で被害が多かったが、その他の地域は少ない発生であった。	・県北地域で越冬量が多かった。	・チャノコカクモンハマキとの同時防除
	チャノミドリヒメヨコバイ	早	多	・4月上旬に巡回調査を開始して以降、多い発生で推移した。	・越冬量が多かった。 ・5月中旬～6月下旬、7月中旬～9月下旬の少雨。	・ネオニコチノイド系剤等による防除
	チャノキイロアザミウマ	並	並多 やや少	・5月上旬までは平年並みの発生であったが、5月下旬に急増した。7月以降は、平年よりやや少なくて推移した。	・越冬量が多かった。 ・気象は発生しやすい条件であったが、発生が多かったチャノミドリヒメヨコバイ等との間に種間競争があった。また、チャノミドリヒメヨコバイとの同時防除で減少した。	・ネオニコチノイド系剤等による防除
	カンザワハダニ	早	多	・巡回調査を開始した2月から3月上旬にかけて発生が多かった。 ・その後7月下旬までは平年並みに推移したが、8月上旬以降多い発生となった。	・1～3月の高温で越冬量が多かった。 ・7月中旬～9月下旬の高温・少雨。	・クロルフェニル剤、ミルベメクチン剤、クロフェンジン剤等による防除
	クワシロカイガラムシ	やや早	並	・ほぼ平年並みの発生で推移した。	・防除の徹底。	・有機リン系剤、IGR剤等による防除
(06年植付)	モザイク病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・土壌消毒 ・アブラムシ類の防除
	疫病	やや早	やや多	・1～5月に一部で発生したが、やや多い発生であった。	・1月～3月の高温。	・シモキサニル剤、フェニルアミド系・マンゼブ混合剤等による防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
	葉かび病	遅	少	・4月上旬から発生し、少ない発生であった。	・抵抗性品種の普及。	・トリフルゾール、チオファネートメチル、TPN剤等による防除
	灰色かび病	やや遅	並	・2月から発生し、平年並の発生で推移した。		・湿度管理 ・プロシドン、チオファネートメチル、ジエトフェンカルブ、フルジオキソニル剤による防除 ・バチルス・スプレックス剤による防除
	アブラムシ類	並	並	・4月下旬に一部で増加したが、概ね平年並の発生であった。		・コナジラミ類との同時防除
	マメハモグリバエ	並	並	・生育初期は少なめで推移したが、4～5月に増加し平年並の発生であった。		・エマメクチン安息香酸塩、スピノサド、シロマジン、ネオニコチノイド系剤等による防除
	タバコガ類	遅	やや少	・3月に一部で認めただけは、ほとんど発生しなかった。	・防虫ネットの普及。	・エマメクチン安息香酸塩、スピノサド、IGR、BT剤等による防除
	コナジラミ類	並	並	・11月下旬と4月下旬に多かったが、おしなべると平年並の発生であった。		・防虫ネットの設置 ・定植時のネオニコチノイド系剤剤剤施用 ・イトフェンブロックス、ピリダベン、プロフェジン、アセチムプリド剤等による防除
冬春キュウリ (06年植付)	モザイク病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	斑点細菌病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・銅剤による防除
	べと病	並	並	・11月下旬から漸増し、平年並の発生であった。		・湿度管理 ・マンゼブ、ホセチル、フェニルアミド系剤による防除
	褐斑病	並	やや多	・11月下旬から発生し、2月以降増加してやや多い発生であった。	・1月～3月の高温。	・ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル、ジエトフェンカルブ・プロシドン等による防除
	うどんこ病	並	並	・11月上旬から発生し、期間を通して平年並で推移した。		・EBI、メキシアクリレート系、TPN、炭酸水素カリウム、MABCピリム剤等による防除
	灰色かび病	並	少	・3月上旬および4月下旬に発生を認めたが、少ない発生であった。		・湿度管理 ・被害果の除去 ・ジエトフェンカルブ、プロシドン、MABCピリム、フルジオキソニル剤等による防除
	菌核病	並	少	・ほとんど発生しなかった。		・被害果の除去 ・灰色かび病との同時防除
	アブラムシ類	並	やや少	・1月に一部で認めただけは、ほとんど発生しなかった。		・定植時のネオニコチノイド系剤剤による防除 ・コナジラミ類、アザミウマ類との同時防除
	ミナミキイロアザミウマ	並	並	・11月下旬から発生し、2月にかけて少なく推移したがその後増加し、平年並の発生となった。		・定植時のネオニコチノイド系剤剤による防除 ・エマメクチン安息香酸塩、スピノサド、ネオニコチノイド系剤等による防除
	コナジラミ類	並	やや多	・11月上旬と2月の発生が多く、やや多い発生であった。		・定植時のネオニコチノイド系剤剤による防除 ・ネオニコチノイド系、トルフェンピラド剤等による防除
秋冬はくさい (06年植付)	モザイク病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	軟腐病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・銅、オキソリニック酸剤による防除
	白斑病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・TPN、キャブタン剤による防除
	べと病	やや遅	並	・11月下旬に発生を認めた。		・白斑病との同時防除
	黒斑病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・白斑病との同時防除
	アブラムシ類	並	並	・11月上旬から発生し平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・IGR、BT、カルタップ、アセフェート、エマメクチン安息香酸塩、スピノサド剤等による防除
	モンシロチョウ	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・コナガとの同時防除
	ハスモンヨトウ	並	並	・10月上旬に発生し、平年並であった。		・コナガとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬はくさい (07年植付)	モザイク病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・アブラムシ類の防除
	軟腐病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・銅、オキリニック酸剤による防除
	白斑病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・TPN、キャブタン剤による防除
	べと病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・白斑病との同時防除
	黒斑病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・白斑病との同時防除
	アブラムシ類	並	並	・10月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・IGR、BT、カルタップ、アセフェート、イマメチン安息香酸塩、スピノサド剤等による防除
	モンシロチョウ	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・コナガとの同時防除
	ハスモンヨトウ	並	並	・10月上旬に発生し、平年並であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (06年植付)	黒腐病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。	・9月下旬～10月中旬の少雨。	・銅、オキリニック酸剤による防除
	菌核病	早	やや少	・11月上旬に発生を確認したが、進展は見られなかった。	・10月上旬～11月上旬の高温。 ・10月下旬の降雨。	・被害株の除去 ・フロムドン、イフロシオン剤等による防除
	アブラムシ類	やや遅	並	・10月上旬から発生し、平年よりやや多い発生であった。	・10月上旬～11月上旬の高温。 ・9月下旬～10月上旬の少雨。	・コナガとの同時防除
	コナガ	やや早	並	・9月上旬から発生し、平年並の発生であった。	・10月上旬～11月上旬の高温。 ・9月上旬の少雨。	・IGR、BT、カルタップ、アセフェート、イマメチン安息香酸塩、スピノサド剤等による防除
	ヨトウムシ類	やや早	並	・9月上旬から発生し、平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	モンシロチョウ	並	並	・10月上旬から発生し、平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
タマネギ (06年植付)	白色疫病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・TPN、マンゼブ、酸アミド系剤による防除
	べと病	やや遅	多	・4月上旬から発生し、多い発生であった。	・4月下旬～5月上旬の多雨。	・TPN、マンゼブ、酸アミド系剤による防除
	ボトリチス属菌による葉枯症	遅	少	・ほとんど発生しなかった。		・べと病との同時防除
	さび病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・べと病との同時防除
	ネギアザミウマ	並	やや多い	・11月下旬から発生し、やや多い発生であった。	・11月下旬～12月下旬の高温。	・アセフェート剤等による防除
	アブラムシ類	遅	やや少	・1月上旬に発生を認めた。		・アザミウマ類との同時防除
冬ニンジン (06年植付)	うどんこ病	遅	やや少	・11月下旬から発生し、やや少ない発生であった。	・11月下旬～12月下旬の高温。	・イミダクワジソールベシル酸塩剤による防除
	ヨトウガ	遅	やや少	・12月上旬に発生を認めた。		・BT、DDVP、PAP剤等による防除
	ネキリムシ	やや遅	並	・ほとんど発生しなかった。		・メソミル、ヘルメトリン剤等による防除
冬レタス (06年植付)	斑点細菌病	やや早	やや多	・9月下旬から発生し、やや多い発生であった。		・銅、オキリニック酸剤による防除
	腐敗病	並	やや少	・11月下旬に発生を認めた。		・銅、オキリニック酸剤による防除
	灰色かび病	並	並	・11月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・チオファネートメチル、イフロシオン剤による防除
	菌核病	やや遅	並	・11月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・チオファネートメチル、イフロシオン剤による防除
	ハスモンヨトウ	やや遅	やや多い	・10月上旬から発生し、やや多いの発生であった。		・アセフェート、ヘルメトリン剤、イマメチン安息香酸塩剤等による防除
	アブラムシ類	やや遅	並	・10月下旬から発生し、平年並の発生であった。		
冬レタス (07年植付)	斑点細菌病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・銅、オキリニック酸剤による防除
	腐敗病	並	やや少	・ほとんど発生しなかった。		・銅、オキリニック酸剤による防除
	灰色かび病	並	並	・ほとんど発生しなかった。		・チオファネートメチル、イフロシオン剤による防除
	菌核病	やや遅	やや少	・11月下旬から発生し、やや少ない発生であった。		・チオファネートメチル、イフロシオン剤による防除
	ハスモンヨトウ	並	やや多い	・9月下旬から発生し、やや多いの発生であった。		・アセフェート、ヘルメトリン剤、イマメチン安息香酸塩剤等による防除
	アブラムシ類	やや遅	並	・10月下旬から発生し、平年並の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イチゴ(本圃) (06年植付)	炭疽病	並	多	・定植後、10月に急増して1月まで発生が続き、多発生であった。	・8月中下旬の多雨と9月中旬の台風。 ・9月下旬～10月の高温。 ・本病に対する感受性の高い品種の普及。	・無感染株の定植 ・発病株の除去
	萎黄病	並	並	・定植直後および2月に発生を認め、平年並の発生であった。		・無感染株の定植 ・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	遅	少	・葉、果実とも2～4月に認めしたが、少ない発生であった。		・古葉、罹病葉の除去 ・被害果の除去 ・EBI、炭酸水素カリウム、ホリオキシン、Mバコピリム剤等による防除
	灰色かび病	遅	やや少	・3月上旬から発生し、4月に増加したが発生量はやや少ない発生であった。		・湿度管理 ・被害果の除去 ・イフロゾリン、ピクロゾリン、ブロンジノ、Mバコピリム、メトキサクリレート系剤等による防除
	アブラムシ類	並	やや少	・10月上旬から11月にかけて増加したがその後は減少し、やや少ない発生であった。		・フルハリネート、ビダベン、DDVP、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	並	多	・10月に急増し、期間を通して平年より多い発生であった。	・10月上旬～11月上旬、1～3月の高温。 ・9月下旬～11月上旬の少雨。	・ビフェナセート、イトキサザール、ミルベメクチン、テフエンピラド剤等による防除 ・天敵による防除
	ハスモンヨトウ	並	並	・9月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・IGR剤、イマメクチン安息香酸塩、スピノサド、ピリダリル剤等による防除
イチゴ(育苗圃) (07年植付)	炭疽病	並	並	・ <i>Colletotrichum acutatum</i> による炭疽病は6月上旬から、 <i>Glomerella cingulata</i> による炭疽病は6月下旬から発生し、平年並の発生であった。		・発病株の除去 ・高設育苗 ・全面マルチ被覆 ・雨よけ育苗 ・親株床の土壌消毒 ・フロピネブ、ジチアノ、有機銅、マンゼブ、フルジオキソニル等による防除
	萎黄病	並	並	・6～7月および9月に発生し、平年並の発生であった。		・発病株の除去 ・土壌消毒
	うどんこ病	並	やや少	・5月上旬から発生し、やや少ない発生であった。		・古葉の除去 ・被害葉の除去 ・EBI剤、炭酸水素カリウム、ホリオキシン、Mバコピリム、マシン油剤等による防除
	輪斑病	やや早	やや多	・5月下旬から6月にかけて増加し、期間を通してやや多い発生であった。	・施肥の少量化。 ・本病に対する感受性が高い品種の普及。	・ピテルタノール剤による防除 ・被害葉の除去
	アブラムシ類	並	並	・5月上旬から発生し、平年並の発生であった。		・ビダベン、アセタミプリド剤等による防除
	ハダニ類	やや遅	多	・5～6月および8月下旬～9月に平年を上回り、多い発生であった。	・5～6月の好天および8月以降の高温、少雨。	・ビフェナセート、イトキサザール、ミルベメクチン、ケルフェナビル剤等による防除
	ハスモンヨトウ	並	並	・7月～9月に発生し平年並の発生であった。		・IGR、BT、イマメクチン安息香酸塩、スピノサド、ピリダリル剤等による防除 ・フェロモントラップによる発生予察

2 発生面積及び防除面積

(単位:ha)

農作物名	作付面積	病害虫名	程度別発生面積					防除面積					
			甚	多	中	少	計	実	延				
水稻 (早期)	2,100	苗いもち				3	3	*	1,400	*	1,400		
		葉いもち			5	105	110		1,000		1,100		
		穂いもち			5	55	60		1,800		1,900		
		紋枯病		10	90	1,250	1,350		1,900		3,500		
		白葉枯病					0		0		0		
		ばか苗病					50	50		1,400		1,400	
		もみ枯細菌病					0	0		0		0	
		ごま葉枯病			5	320	325	*	1,400	*	1,400		
		黄化萎縮病					0	0		0		0	
		縞葉枯病					720	720		-		-	
		萎縮病					0	0		-		-	
		ニカメイガ						0		0		0	
		セジロウンカ					2,100	2,100	*	1,900	*	3,000	
		トビロウンカ					920	920		1,900		3,000	
		ヒメトビウンカ					1,650	1,650	*	1,900	*	3,000	
		ツマグロヨコバイ					1,700	1,700	*	1,900	*	3,000	
		イネゾウムシ				5	420	425	*	1,950	*	2,000	
		イネクロカメムシ				8	502	510		150		150	
		斑点米カメムシ類		1		50	599	650		1,950		3,700	
		イチモンジセセリ				5	255	260	*	1,700	*	2,900	
		フタオビコヤガ				5	550	555	*	1,700	*	2,900	
イネオトウ					50	50	*	1,700	*	2,900			
アワオトウ					30	30	*	1,600	*	2,900			
コブノメイガ		2		90	1,578	1,690		1,700		2,900			
イネミズゾウムシ			3	52	1,545	1,600		1,950		2,000			
水稻 (普通期)	12,500	苗いもち			1	9	10	*	8,000	*	8,000		
		葉いもち			20	980	1,000		11,300		11,300		
		穂いもち			10	560	570		11,100		11,100		
		紋枯病		4	30	251	7,225	7,510		11,500		16,500	
		白葉枯病				3	7	10		4		4	
		ばか苗病				2	223	225		8,000		8,000	
		もみ枯細菌病					1,875	1,875	*	1,700	*	1,700	
		ごま葉枯病			2	38	1,325	1,365	*	6,800	*	6,800	
		黄化萎縮病					0	0		0		0	
		縞葉枯病		1		4	4,015	4,020		-		-	
		萎縮病					0	0		-		-	
		ニカメイガ						0		0		0	
		セジロウンカ					390	11,330	11,720	*	12,200	*	34,500
		トビロウンカ		120	140	1,630	5,585	7,475		12,200		34,500	
		ヒメトビウンカ					6,530	6,530	*	12,200	*	34,500	
		ツマグロヨコバイ					4,430	4,430	*	12,200	*	34,500	
		イネゾウムシ				5	1,205	1,210	*	9,100	*	9,200	
		イネクロカメムシ				40	510	550		300		300	
		斑点米カメムシ類			5	200	5,245	5,450		11,400		19,500	
		イチモンジセセリ				10	470	480	*	12,000	*	24,500	
		フタオビコヤガ				100	1,775	1,875	*	12,000	*	24,500	
イネオトウ					115	115	*	12,000	*	24,500			
アワオトウ					15	15	*	12,000	*	24,500			
コブノメイガ		5	50	900	11,385	12,340		12,000		24,500			
イネミズゾウムシ				50	1,160	1,210		9,100		9,200			
スクミリンゴガイ		40	650	550	1,785	3,025		1,500		1,500			
麦	1,698	さび病類	0	0	0	100	100		0		0		
		うどんこ病	0	1	9	370	380	*	1,650	*	3,200		
		赤かび病	0	0	0	475	475		1,650		3,200		
		黒穂病類	0	0	0	420	420		350		350		
		斑葉病	0	0	0	300	300	*	350	*	350		
		小麦縞萎縮病	0	0	0	0	0		0		0		
		大麦縞萎縮病	0	0	0	50	50		0		0		
		株腐病	0	0	0	30	30		0		0		
		アブラムシ類	0	0	0	1,340	1,340		20		20		
		ばれいしょ	4,110 春作:3030 秋作:1080	疫病		1	19	90	110		2,800		5,600
モザイク病				5	20	25		-		-			
青枯病					50	50		1,000		1,000			
葉巻病				10	140	150		-		-			
アブラムシ類				70	1,000	1,070		4,000		7,500			
ニジュウヤホシテントウ				5	335	340	*	4,000	*	7,500			
ジャガイモガ			50	950	1,000	*	4,000	*	7,500				
食葉性ヤガ類			35	380	415	*	4,000	*	7,500				

農作物名	作付面積	病害虫名	程度別発生面積					防除面積	
			甚	多	中	少	計	実	延
大豆	400	紫斑病				0	0		
		べと病	0	0	0	270	270	0	0
		葉焼病	0	0	0	400	400	0	0
		モザイク病	0	0	0	3	3		
		アブラムシ類	0	0	0	130	130	*	360
		コガネムシ類	0	0	0	30	30		30
		ハスモンヨトウ	0	0	0	320	320		360
		ダイズサヤタマバエ					0		
		ヒメサヤムシ類					0		
		マメシロアザミウマ					0		
		シロイチモジマダラメイガ					0		
ウワバ類	0	0	0	90	90	*	360		
カメムシ類	0	0	0	120	120	*	360		
かんきつ	4,354	そうか病	-	-	60	400	460		3,700
		黒点病	20	50	500	2,770	3,340		3,900
		かいよう病	5	60	300	2,505	2,870		3,300
		灰色かび病	10	90	700	1,600	2,400	*	3,900
		ヤノネカイガラムシ	-	-	10	90	100	*	2,600
		ミカンハダニ	-	10	240	2,390	2,640		3,900
		ミカンサビダニ	-	-	50	350	400		3,500
		カメムシ類	-	-	50	400	450		3,800
		チャノキイロアザミウマ	5	85	700	1,390	2,180	*	3,900
		マルカイガラムシ類	-	-	50	400	450	*	2,600
		ロウムシ類	-	-	1	39	40		100
		ゴマダラカミキリ	-	30	150	420	600	*	1,300
		クワゴマダラヒトリ	-	-	-	250	250		1,200
		アブラムシ類	-	-	100	1,350	1,450	*	3,900
びわ	610	がんしゅ病	-	5	15	470	490		430
		灰斑病	-	10	100	500	610		550
		カメムシ類	-	-	-	5	5		-
		ナシヒメシロアザミウマ	5	15	30	330	380		350
なし	82	黒星病	-	5	10	35	50		82
		赤星病	-	-	10	30	40		82
		うどんこ病	-	-	-	30	30	*	82
		輪紋病	-	-	2	13	15		82
		ナシヒメシロアザミウマ	-	5	15	50	70		80
		ハダニ類	-	5	20	30	55		70
		カメムシ類	-	-	-	5	5		50
		アブラムシ類	-	-	5	30	35		80
ぶどう	125	晩腐病	-	-	5	25	30		125
		うどんこ病	-	-	-	5	5	*	125
		褐斑病	-	-	20	50	70	*	125
		黒とう病	-	-	20	40	60		125
		べと病	-	-	10	40	50		125
		灰色かび病	-	-	2	8	10		125
		チャノキイロアザミウマ	-	3	2	8	10		125
茶	757	炭そ病	-	-	30	270	300		750
		もち病	-	-	10	70	80	*	380
		チャノコカクモンハマキ	-	10	90	190	290		680
		チャノホソガ	-	30	100	300	430	*	680
		チャノミドリヒメヨコバイ	20	100	150	400	670	*	720
		カンザワハダニ	5	15	100	300	420		750
		チャノキイロアザミウマ	-	30	150	450	630	*	700
		クワシロカイガラムシ	-	10	100	350	460		700
冬春トマト (2006年植付)	112	疫病			1	18	19		112
		葉かび病			1	24	25	*	112
		灰色かび病		2	10	35	47		112
		モザイク病				4	4		-
		アブラムシ類				9	9		112
		コナジラミ類			3	82	85		112
冬春きゅうり (2006年植付)	41	べと病		1	2	6	28		41
		炭疽病					0		5
		うどんこ病		1	3	28	32		41
		斑点細菌病				2	2		11
		モザイク病				1	1		-
		灰色かび病			1	6	7		41
		菌核病			2	2	4	*	41
		アブラムシ類				3	3	*	41
		ミナミキイロアザミウマ	1	1	5	13	20		41
		コナジラミ類		1	4	22	27	*	41
ウリハムシ				1	1	*	41		

農作物名	作付面積	病害虫名	程度別発生面積					防除面積		
			甚	多	中	少	計	実	延	
秋冬はくさい (2006年植付)	195	軟腐病				25	25		100	150
		白斑病			10	50	60		140	180
		べと病			1	16	17	*	140	* 180
		黒斑病			1	11	12	*	140	* 180
		モザイク病				5	5	-	-	-
		アブラムシ類			5	95	100	*	195	* 600
		コナガ			4	90	94		195	600
冬キャベツ (2006年植付)	188	ヨトウガ			5	60	65	*	195	* 600
		ハイダラメイガ			1	19	20	*	195	* 600
		黒腐病			2	15	17		40	40
		菌核病			1	15	16		150	150
		べと病				15	15		30	30
		アブラムシ類			1	79	80	*	188	* 550
		モンシロチョウ			5	45	50	*	188	* 550
たまねぎ (2006年植付)	498	コナガ		2	20	80	102		188	550
		ヨトウガ			10	50	60	*	188	* 550
		ハスモンヨトウ			10	50	60	*	188	* 550
		ウワバ類			5	40	45	*	188	* 550
		白色疫病			5	80	85		498	1,500
		べと病		5	35	140	180		498	1,500
		ホトリチス葉枯症				50	50	*	498	* 1,500
冬にんじん (2006年植付)	525	アブラムシ類				3	3	*	200	* 400
		ネギアザミウマ		3	17	430	450		495	950
		黒葉枯病			5	95	100		290	400
冬レタス (2006年植付)	527	うどんこ病			20	150	170	*	290	400
		ヨトウガ			3	60	63		270	270
		ネキリムシ類			1	50	51		400	400
いちご (2006年植付)	309	灰色かび病			10	40	50		260	520
		菌核病			5	100	105	*	260	* 520
		斑点細菌病		1	8	96	105		270	540
		腐敗病				20	20	*	270	* 540
		アブラムシ類			5	100	105	*	527	* 1,200
		ネキリムシ類				100	100		260	260
いちご (2006年植付)	309	ハスモンヨトウ			10	175	185		527	1,200
		炭疽病	5	11	22	46	84		309	930
		萎黄病				12	12		250	250
		うどんこ病			2	24	26		309	2,500
		灰色かび病		1	6	60	67		309	870
		アブラムシ類			5	64	69		309	460
いちご (2006年植付)	309	ハダニ類	1	10	45	150	206		309	1,250
		ハスモンヨトウ		1	19	250	270		309	900

注)防除面積の*は同時防除